

や日常行事を邪魔したいなどの場合が考えられる。

具体的だが論理的ではないかもっともらしさに欠ける脅威は、その脅威の深刻度が少ないことを示唆しているのかもしれない。例えばある高校生が「翌日の昼食時間に学校の講堂を数百ポンドのプルトニウムで爆破するつもりだ。」との脅迫状を送りつけた。この脅迫状には詳細が記され、時間、場所、及び武器が具体的に述べられている。しかしこの詳細には説得性がない。プルトニウムは正規市場でも闇市場でも入手できる可能性がない。高価で運搬が難しい。操作は危険で、核反応を引き起こすには複雑な起爆装置が必要である。高校生がプルトニウムを入手しうる可能性はもともとないが、それを数百ポンドも入手することは不可能である。その生徒はプルトニウムを起爆するための知識も複雑な装置も持っていないだろう。このような非現実的な脅威が実行されることは明らかにあり得ない。

②脅威の感情的な表現

感情的な表現は脅威者の精神状態を知る重要な手がかりとなる。感情はメロドラマ的な用語や記号の異常な使い方や伝えられる。たとえば「お前は嫌いだ!!!!!!」、「お前は俺の人生を台無しにした!!!!!!」、「神のお恵みを!!!!!!」などのように興奮したあるいは支離滅裂な文章や、神や宗教的存在または最後通牒的文章がこれに当たる。

感情的な脅威は評価者に脅威者の気質に関する情報を提供するが、それは脅威の危険度の尺度になるわけではない。感情的な脅威は恐ろしく感じられるが、脅威に示される感情の激しさとその脅威がもたらす危険度との間には何の相関関係も見えていない。

③事件促進圧力 (Precipitating Stressor)

事件、環境、反動、状況などは事件の発生を促進する圧力となりうる。促進圧力は一見したところ無意味で脅威と直接の関係がないように見えるが、それにもかかわらずそれは触媒になることがある。例えば、生徒が登校前に母親と口論した。口論の理由は学校と何の関係もない些細なことであっただろう。しかしそれが感情的な連鎖反応を引き起こし、その日、学校で他の生徒への脅威となる結果に繋がってしまった。(それはおそらく彼が過去において考えていたことかもしれないが。)

促進圧力の衝撃は明らかに”性向要因 (Predisposing Factors)” に深く関係している。性向要因とは個人の底流にある性向、性格、気質などで、青少年を暴力や暴力的行為の幻想に傾かせる気質である。従って暴力の”引き金”に関する情報分析では、失敗や意気消沈に対する生徒の弱さなど、底流に流れるこれら性向要因を広範に取り上げて検討する必要がある。

1-3-10 リスクのレベル「発」

低レベルの脅威：犠牲者や公衆の安全に最小の危機しか持ち込まない脅威。

- ・脅威は曖昧で間接的。
- ・脅威に含まれる情報は首尾一貫せず、詳細に欠けるか尤もらしくない。

- ・脅威は現実性に欠ける。
 - ・脅威の内容から、脅威者が脅威を実行するように思われない。
- 中レベルの脅威：実行されるかもしれない脅威、但し必ず実行されるとは思えない。
- ・低レベル脅威よりは直接的で具体的である。
 - ・脅威の内容から察して、脅威者はどのように実行するかを多少とも検討している。
 - ・場所と時間の可能性について一般的に述べられている。（但し表現内容は詳細計画と呼ぶには遙かに低い。）
 - ・脅威者が準備行動に入った事を示す強い示唆はない。但し、準備行動に入った可能性を示すベールをかぶせた言及や、曖昧なまたは決定的ではない証拠を示すことがある。――暴力行為の計画を示す書類や映画の存在を暗示したり、武器の入手可能性について一般的にのべることなど。
 - ・脅威が空虚でないことを伝えるための特定の表現が含まれることがある。「俺は本気だぜ」、「俺は本当にやるつもりだぜ」など。
- 高レベルの脅威：他人に対する緊迫した深刻な危険をもたらすと思われる脅威。
- ・脅威は直接的、具体的で尤もらしい。
 - ・脅威は、脅威を実行するのに必要かつ具体的な処置をとったことを示している。例えば脅威者は武器を入手し練習を済ませたとか、犠牲者を監視下に置いている事を示す表現。

1-3-11 四側面型評価モデル「発」

脅威を評価するモデルとして次のような四側面型評価が提案されている。

第一側面：生徒の個性

個性は自分の世界観及び自己観、並びに他人との対話の進め方を形成する。ある人物の個性の正確な像（すがた）を把握するには、一定期間、色々な状況の下でその人物の行動を観察する必要がある。

青少年の個性を理解する手がかりは、次の状態下にある彼らをよく観察することで得られる。

- ・日常生活の中で遭遇する衝突、失望、失敗、侮辱、その他緊張状態に対処している時。
- ・怒り、欲求不満、失望、侮辱、悲しみ、その他類似の感情を表現しているとき。
- ・頓挫、失敗、実際のまたは感知した批判、失望、その他マイナスの経験に対して弾力的対応を表明する時、または表明しないとき。
- ・生徒が自分自身をどのように感じているか、自分自身はどんな種類の人物であると想像しているのか、自分が他人からどのように見えるかを表明するとき。
- ・規則、指示、あるいは権威像に対応するとき。
- ・管理、注意、尊敬、賞賛、衝突、その他のニーズへの欲望または必要性を表明しまたは表現するとき。

- ・他人の感情または経験を理解したことを表明し、または表明しないとき。
- ・他人に対する自分の態度を表明するとき。(例えば、生徒は他人を劣者として、または軽蔑の念をもってみているか)

評価者自身が生徒を直接に観察できなかったときは、生徒が脅威を実行する前からその生徒を知っている人から情報を求めること。

[着眼すべき注意信号]

- ・リーケージ（考えを漏らす事）(Leakage)
- ・欲求不満に対して我慢できない
- ・気持ちの処理能力が貧弱
- ・弾力性の欠如
- ・愛情関係の失敗
- ・”不公正収集家”
- ・抑鬱の兆候
- ・自己陶醉
- ・隔絶
- ・他人の人格無視
- ・他人への無理解
- ・誇大な権利意識
- ・優越的な態度
- ・大げさな、あるいは病的なまでの注意願望
- ・責任の外部転嫁
- ・低い自尊心を隠す
- ・怒りを制御できない
- ・偏狭性
- ・不適切なユーモア
- ・他人を誤魔化そうとする
- ・他人を信用しない
- ・閉鎖的な仲間
- ・行為の変化
- ・頑固で独断的
- ・劇的な暴力に異常な関心を示す
- ・暴力が充満した娯楽に魅惑される
- ・マイナスの人物像
- ・脅威実行に関連する行為

第二側面：家族の力学

家族の力学とは、家庭内に存在する行動、考え方、信念、伝統、役割、慣習及び価値観のパターンである。生徒が脅威を行った場合、その生徒の家庭内の力学及びそれらの力学を生徒及び生徒の家族がどのように感じているか—に関する知識をもつことが、脅威の実行を決定する際に役割を果たす生徒の生活環境や生徒への圧力を理解する上で主要な要素となる。

[着眼すべき注意信号]

- ・荒々しい親子関係
- ・病的行為の容認
- ・手近な武器
- ・親密さの欠如
- ・生徒が家庭を支配している
- ・無制限なテレビ・インターネット

第三側面：学校の力学とその力学内での生徒の役割

学校の力学とは、学校文化の中に存在する行動、考え方、信念、伝統、役割、慣習及び価値観のパターンである。いくつかのパターンは明瞭であろうし、他のいくつかは目立たないかもしれない。学校内で公式・非公式に評価され誉められる行為を認識しておくことは、なぜ一部の学生が学校当局に気に入られ関心を惹き学生仲間の中で権威を持つのかを説明するのに役に立つ。それはまた、ある学生が学校文化によってある”役割”を与えられる説明となるだろうし、生徒が学校の価値体系の中に自分自身がどのように溶け込んでいるのか、またはなぜとけ込めないのかを知るのに役立つ。

[着眼すべき注意信号]

暴力行為が学校で発生した場合、学校は犯罪現場となる。どの暴力犯罪の場合と同様に、生徒が他の場所でなく何故学校で犯行を起こすに到ったのか、その決心に影響を与えた原因は学校のどこにあったのかを理解することが必要である。教育者または評価者にとって自分の学校を”批評”または評価することは困難であるかもしれないが、学校文化の中における生徒の役割と、生徒が自分の学校を脅威の目標にしようとする理由を—生徒の視点から—よく理解するために、学校の持つ特異な力学を—脅威の発生する前に—多少とも理解しておくことが必要である。

- ・生徒の学校に対する愛着の欠如
- ・不作法な行為に寛容
- ・不公平な罰則
- ・硬直した学校文化
- ・生徒間の序列 (Pecking Order)
- ・無言律

- ・コンピュータの利用が管理されていない。

学校は以前に生徒が関係した事件や問題を全て文書化し、今後の脅威評価を行う際に利用できるように整備することが必要である。

第四側面：社会の力学

社会の力学とは、生徒が住むコミュニティ（広くとらえること）に存在する行動、考え方、信念、伝統、役割、慣習及び価値観のパターンである。これらのパターンもまた、生徒の行動、生徒が生徒自身をどのように感じているか、人生の見方、態度、選択の自由、ライフスタイルに大きな影響を与える。青少年の信念と意見、友人の選択、活動、娯楽、読書内容、あるいは薬物、アルコールまたは武器に対する生徒の態度は全て、生徒が住み通学するコミュニティの社会力学を反映するだろう。

（広く捕らえた）コミュニティの中では、青少年の仲間グループがその態度や行動に極めて大きな役割を持っている。生徒の友人の選択や仲間との関わりは、その生徒の態度、自己意識、脅威を行うか行わないかの決定に価値のある手がかりを与えるであろう。

[着眼すべき注意信号]

- ・メディア、娯楽、技術
- ・仲間グループ
- ・薬物とアルコール
- ・外部への関心
- ・物まね効果 (Copycat Effect)

1-3-12 脅威の判断基準「発」

低レベル：脅威が低レベルと評価された場合は生徒全般の安全への脅威は殆どなく、多くの場合犯罪行為の可能性について法執行部門による捜査を必要としないだろう。

（しかしながら、法執行部門はどのレベルの脅威に関しても情報を求められる事になるだろう。）

中レベル：脅威が中レベルと判定されると、多くの場合、その対応には追加の情報取得のために法執行部門その他関連部門との接触が含まれる。（その結果としてこの脅威は低レベルまたは高レベルに再分類されることもある。）

高レベル：脅威が高レベルと評価されると、ほとんどの場合、学校は所管の法執行部門にただちに通報しなければならない。学校と法執行官との間で事前に決められ演習済みの対応計画が実行に移され、法執行部門は通報を受け、その脅威に対応するために実行されるその後の全ての処置・行為に関係する。